

# まんまで えー やん

(6)

定時制・湊川高校の春

つながつた。

「嫌になつたら辞めよう」。だが、踏み出した一步は天職につながつた。

「この私が?」。当時、朝鮮語の教員免許を持っている人は少なかつたという。

「嫌になつたら辞めよう」。だが、踏み出した一步は天職につながつた。

一枚の資料が残されている。  
『明日から授業に「朝鮮語」が取り入れられます』

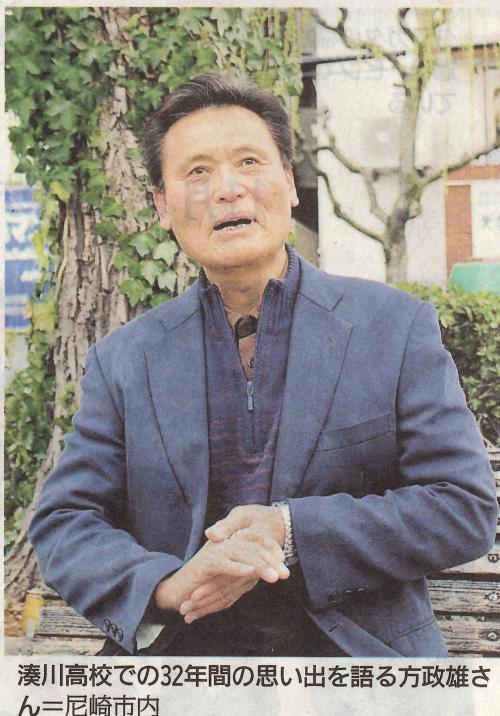
1973年、湊川高校に「朝

鮮語」が必修科目として導入された。全国の公立高校では初めてだつた。

全校生徒に配られた資料に、その目的が記されている。「朝鮮語を学ぶことを通して、朝鮮民族だけでなくすべての民族に対し、水平の関係で相手を見ることができる」。

「言葉だけでなく、心を教えてきたつもりです。違いを認め合い、共に生きる『水平の視点』を」と語るのは、作家の方政雄さん(69)。伊丹市、同校で32年間、朝鮮語を教えた。

## 揺るがぬ教育をすべての子に



湊川高校での32年間の思い出を語る方政雄さん=尼崎市内

(末永陽子)

### 水平の視点

當時は十分な教材もなく、先輩教師だった在日コリアン詩人金時鐘さんは、自家製プリントで授業を続けていた。教室で出会つたのは、外国籍や家庭内暴力、母子家庭、障害者などさまざまな事情で「差別され、疎外されてきた子どもたち」。かたくなに心を閉ざす姿が、自分の青春時代と重なつた。

雨漏りするバラック小屋での日々。自分に流れる血も、何もかもが嫌だった。通名(日本名)を名乗り、「日本人の『仮面』をかぶつて生きていた」。転機は高校時代。どんな自分たり。着任当時は荒れた子が多くたが、怒鳴らず暴力も振るわないと決めていた。「授業に出てくれてありがとう」。時に生い立ちも語りながら、朝鮮語を教えた。

「朝鮮語は就職や進学に不要」と同僚から反発された時期もあつたが、熱意がしぶむことはなかつた。

退職後は、教え子たちから同窓会に誘われることが増えた。「先生、あの頃ごめんな」。「面倒かけやがつて」。こんな会話が宝物だと笑う。

すべての子どもに、揺るぎない教育を。湊川の伝統が、これからも続いてほしいと願う。